

# 漱石と村上春樹の作品における女主人公の生き方

—『三四郎』の美禰子と『ノルウェイの森』の直子から見て—

黄 馨 誼\*

## 1. はじめに

漱石と村上春樹を比較する論説は主として物語の構造、主人公の造形、漱石に対する意識などから成る。また、比較される作品も『ノルウェイの森』と『こゝろ』に集中している。<sup>1</sup>しかし、『三四郎』と『ノルウェイの森』はともに恋愛の実らない小説であり、主人公たちが上京して大学で勉強する時期が物語の舞台とされている。それらによって、本稿は『三四郎』と『ノルウェイの森』を比較対象として考察していきたい。

半田淳子は『『三四郎』も『ノルウェイの森』も、主人公が大学に入学するために地方から上京し、そこで様々な人間と出会い、女性を愛し、そして最後には失うという共通したストーリー展開を示している。』<sup>2</sup>と指摘している。すなわち、主人公たちが一度もらったものは、最後には何も残らない。半田氏は二つの作品における背景、主人公たちの造形を明らかにして、女性たちの造形についても少し触れたが、女性達を失う原因には言及していない。おそらくこれは彼女たちの生き方と関わりがあるだろう。本稿は美禰子と直子に焦点を絞って考察しながら、二人の女性像を明らかにし、それらの解明を通して二人の女主人公のそれぞれの時代における生き方を探ってみる。

## 2. 『三四郎』—美禰子の生き方

周知のように、美禰子は「アンコンシヤス・ヒボクリット」<sup>3</sup>として物語で造形された。また、彼女は実に野々宮を愛して、彼を挑発するという論説が多く出てくる。このように、野々宮、三四郎、そして美禰子という三角関係が成り立っている。本節ではこうした三角関係における美禰子の女性像を探り、そして美禰子の結婚から彼女の生き方を探ってみる。

### 2.1 三角関係から見る美禰子の女性像

先行研究は美禰子を、男を誘惑する謎の女として位置づけている。中山和子は「『自意識』の女美禰子というものを想定する、深刻な読みが従来からある。」<sup>3</sup>と述べている。つまり、美禰子は高等教育を受けた自意識を持つ女性というのが従来の論説である。そして、三四郎、野々宮と美禰子から成り立つ三角関係に関する論説がある。確かに美禰子と野々宮との間には不自然な空気が漂っている。例えば、最も印象的なのは丹青会の展覧会の時、美禰子は「原口より遠くの野々宮を見」(P211)で、そして、野々宮は「妙な連と来ましたね」(P211)と言って、美禰子が「似合ふでせう」(P211)と答えた場面がある。これは三角関係が浮上すると同時に、関係の破綻の始まりとも言えるだろう。

三四郎から見れば、東京に住み高等教育を受け、芸術にも興味を示している美禰子は、都会の雰囲気を持つ女性である。さらに、英語を熱心に勉強

\* 国立台湾大学院生

する点から、美禰子は西洋の文化に深く影響されていると推測できる。19世紀末～20世紀には自力で生活出来る女性は「新しい女」と呼ばれた。美禰子は正に、早い時期より周囲の環境から西洋文化に接した「新しい女」と推測できよう。

そして、田舎から上京し、東京での新しい生活に大いに期待している三四郎<sup>4</sup>が美禰子のような女性に魅せられるのは自然だろう。が、明治社会において女性は「良妻賢母」であることが期待されていたことも見落としてはならない。佐藤能丸は次のように論じている。

「良妻賢母」は、「賢母」の強調に近代性があり（中略）近藤芳樹編『明治孝節録』（一八七七年、宮内省）に示される儒教的な「節婦」像と重なり、「婦徳」「女徳」の涵養が強調される場合が多かった<sup>5</sup>

上記から、明治時代には教育を通して女性が儒教的色彩を持つ良妻賢母のように造形されていたことが窺える。物語に戻ると、美禰子は良妻賢母に育て上げられたのではなく、彼女は自分の人生を自分で決め、そして自由恋愛の道を選んだのである。

また、美禰子の愛に対する積極性も、前に引用した丹青会の場面から見える。野々宮に向かう視線だけではなく、三四郎に対する態度も窺える。なぜ三四郎を愛していないのに、曖昧な雰囲気を作ったのか。それは三四郎が美禰子に一目惚れをし、また彼自身の自惚れによって美禰子が自分に好意を持っていると思いついたためである。その点に気づいた美禰子は野々宮の関心を集めるように三四郎を利用したのであろう。また、なぜ三四郎は美禰子と恋人同士になれなかったのか。以下のように考えられる。

与次郎は「其代り、夫として尊敬の出来ない人の所へは始から行く気はないんだから、相手になるものは其気で居なくつちや不可ない。さう云ふ點で君だの僕だのは、あの女の夫になる資格はないんだよ。」（P.297）と美禰子を分析した。確か

に美禰子の周りに、年齢や彼女が尊敬できる人間という条件に相応しいのは野々宮しかいない。美禰子が野々宮を恋愛の相手にすることは容易に納得できるだろう<sup>6</sup>。しかし、野々宮は研究にしか興味がないゆえに、二人は恋人同士になれない。

一方、美禰子に対する敬慕が隠せない三四郎は、たとえ広田先生や与次郎から忠告をもらっても、自分で彼女の気持ちをどうしても確認したい。丹青会の場面において、美禰子がわざと野々宮に「似合ふでせう」（P.211）と言ったのはおそらく野々宮に嫉妬させようと図っていたのだろう。三四郎は後に「野々宮さんを愚弄したのですか」（P.215）と美禰子に聞いたが、美禰子は無邪気に否定した。この「無邪気」は意識して無邪気に振る舞った可能性も考えられるだろう。なぜかという、美禰子は自分の企みを三四郎に気づかれて、自分の悪いところを隠すように無邪気に振る舞うわけである。

以上の分析から見れば、美禰子の女性像はまず言うまでもなく、明治時代の新しい女である。そして、彼女は自意識が強い、いわゆる広田先生が言ったような利己主義の「露悪家」である。美禰子は三四郎を魅惑させ、露見したときまた「無邪気」な顔で自分の企みを隠そうとした。

さらに、中山和子が美禰子の女性像を作品に出る人魚<sup>マーメイド</sup>画の視点から以下のように論じている。

男たちにむかって水底の樂園の至福をささやきかけるように、誘いこむようにして姿を消す、美しい水の女のイメージ、マーメイド、男たちの不滅のアニマー。<sup>7</sup>

美禰子は「無邪気」と「露悪家」の二つの性格を同時に持っていることが窺える。つまり、作者には美禰子を理想の女性として造形しながら、悪い部分を隠そうとする意識をも持っていたという矛盾を抱えていたことは想像できるのであろう。自由や理想を追求することは共に美禰子の女性像の一部であり、彼女が結婚することを選択する要となると思われる。

## 2.2 美禰子の結婚

ストーリーは美禰子がそれまで登場していない男と結婚する場面で終わっている。しかも、それはそもそもよし子と婚約した男である。この微妙な結末はいったいどのような意味を示唆しているのであろうか。

中山和子は明治時代の社会背景を要素として、美禰子の結婚を以下のように述べている。

美禰子が「無意識」の技巧を弄するとすればそれは「天性」の発露であるよりも、常に見られる側に置かれた立場、客体としての「女」という父権的社会的制度によるのである。見る側にある「男」の視線を内面化してディスプレイする時、無意識と意識の境界は曖昧になるだろう。(中略)そして、一見、奔放自由であるかに見える美禰子が、じつは制度としての「女」、「結婚」という制度のなかの「擒」であることを示す物語が『三四郎』である。<sup>8</sup>

氏の論説に従えば、表には美禰子は都会の新しい女として周りの男性の目に映っているが、実際には古くからの枠組みの中にいる。となれば、美禰子が結婚という道を選ぶのは現実に妥協したとも言えるだろう。しかし、もし結婚の道を選ぶというのが制度の擒になることを意味しているなら、なぜ自由を捨てて、結婚するのか。中山氏が言った「商売結婚」を理由にするには少し足りないと思われる。ゆえに、筆者は美禰子の結婚を彼女の女性像と考え合わせて、おそらく「逃避」の意味が含まれると考えたい。

理由として、前節で触れたように、美禰子はそもそも未来に対して考えを抱いており、そして自由恋愛をし、理想を追求する女性であった。しかし、野々宮との恋愛の失敗によって、彼女の所謂理想状態に欠陥が生じたため、今の生活圏から離れる窮地にたたされるのであろう。そして、前述したように、彼女は自分の欠点を隠して、理想の状態だけを表す。彼女の理想状態を回復するためには、野々宮の条件と同じかより良い男を結婚相

手にするのが一つの手段であろう。更に、周りの人に嘲笑されないように、結婚するのも今の生活圏から逃げる一つの手段であることを思い立ったと考えられる。

明治時代の婚姻について、阿部恒久は考察を通して、以下のように示している。

第一に、家に、家族に対して絶対的支配権をもつ戸主を置いた(中略)第二に、結婚し妻となった女性を戸主=夫の支配下に置いた。妻は夫の家に入ること(中略)、妻は制限付き無能力者であると規定されて夫の同意なく財産を処分できなかった。<sup>9</sup>

上述から明治時代の父権色彩が濃くて、結婚というのは女性にとって支配されることに等しいと思える。支配されるにしても、擒にしても、美禰子にとって結婚というのは自分の自由が奪われることになろう。とはいえ、理想的な状態に戻って、またかつて自分を傷つけた人がいる生活圏から逃げる唯一の方法は結婚しかない。

結婚相手にどのような感情を持っているのかは書かれていないが、最後に呟いた「われは我が愆を知る。我が罪は常に我が前にあり」(P.306)という詩句は逃げるために結婚するのを罪として認め、また自由が奪われて、生活に囲まれるのもその罪を償う手段と考えられないこともない。

## 2.3 結び

以上から『三四郎』の時代には、「結婚」は確かに古くからの枠組みに囲まれることになるが、新しい女の姿で明治時代の都会に生きる美禰子が、おそらく野々宮との恋愛の失敗により、今の生活圏から離れ、また理想的な状態に戻るための唯一の道は、結婚することであろう。

理想のものしか受け入れないことに挫けたとき、別のところで理想を求めることしか考えられない美禰子にとっては、恋愛にも、野々宮という「ずっと高い所に居」る人と恋人同士になりたがり、また結婚にも、「金縁の眼鏡を掛けて、遠くから

見ても色光沢のいい男」と夫婦になったわけである。全てが理想で、彼女自身も理想的な女と造形されている。ゆえに、理想が破られたことを受け入れなかった時、逃避という道を選ぶしかないのであろう。それが美禰子という新しい女の生き方ではないだろうか。

### 3. 『ノルウェイの森』—直子の生き方

『ノルウェイの森』の語り手の「僕」は親友キズキが自殺してから、キズキの恋人である直子と仲良くなる。直子はキズキが死んでから普通に生活できなくなり、阿美寮という療養所へ行った。しかし、最後にはキズキと同じように自殺した。

今まで直子に関する論説は主として直子を死の代表として、或いは自己回復についての観点から論じ始める<sup>10</sup>。いずれも直子は「向かう世界」の方で、現実世界へ帰還することができなくて自殺したと指摘している。確かに、直子は何度も主人公の「僕」に救済を求めたが、何度も失敗に終わって、最後には自殺を選んだ。しかし、以上の論説にはなぜ直子が現実世界へ帰還したがるのか明らかにされていない。この点は直子の自殺と生き方を論じる時に無視できないことである。ゆえに、本節ではまず直子が混乱する原因を明らかにして、その中から直子が現実世界へ帰還する願いを明らかにし、そして彼女の死因を究明しながら生き方を探していきたい。

#### 3.1 直子の混乱

物語の最初に、「僕」は直子が言った野井戸の話が頭に浮かんできた場面がある。その時、直子は「それは——正しくないことだからよ、あなたにとっても私にとっても（中略）だって誰かが誰かをずっと永遠に守りつづけるなんて、そんなこと不可能だからよ。」(P.14)と自分の考えを示した。直子は人間関係と言葉遣いを細かく考えて、「正しい」と「対等」にすることを追求する

傾向がある。この時の直子はすでに「暗くて、冷たくて、混乱して」(P.15)いる状態であるから、直子が追求している正しさなどのものがおそらく混乱が起こる原因として考えられる。

直子が混乱に陥ったのは恋人のキズキの死と関係があるだろう。なぜなら、キズキ、直子そして「僕」が三人いる時、「それはまるで僕がゲストであり、キズキが有能なホストであり、直子がアシスタントであるTVのトーク番組みたいだった。」(P.36)と例えたように、ホストがいない番組にはアシスタントの役割がなくなるからである。つまり、キズキに常に頼って生きてきた直子はキズキがいる場でしか生きられない。キズキと共に築いた「その世界」は直子の全てであり、直子にとっては完璧な世界である。それはおそらく小さい頃から二人で一緒に成長してきた直子には、キズキ以外の友人がおらず、情報伝達や価値観の構築などの彼女のすべてはキズキを通してなされたと言えよう。

一方、「もちろん彼は私と寝たがったわ。だから私たち何度も何度もためしてみたのよ。でも駄目だったの。(中略)」(P.164)と直子は告白している。キズキと一緒にいる「その世界」は直子にとって唯一で完璧な世界でありながら、性的なことがうまくできなかった。直子はおそらくキズキとセックスした時から、濡れなかったという自分の不完全性に気づいたのであろう。

このように完全な世界と不完全な自分の間にどこか狂っていると思ったことによって、直子は混乱に陥った。直子の完全に対する考えは「僕」に送った手紙から窺える。以下の通りである。

『公正』なんていうのはどう考えても男の人の使う言葉ですね。(中略)私は自分があなたに対して公正ではなかったと思います。そしてそれでずいぶんあなたをひきずりまわしたり、傷つけたりしたんだろうと思います。でもそのことで、私だって自分自身をひきずりまわして、自分自身を傷つけてきたのです。

(中略) 私は不完全な人間です。(P.127)

直子が考えた「公正」とは、いわば自分が「公正」に人と接して、「公正」な人間になることで、人を傷つけないのは、完全な人間になり、現実世界と繋がる条件である。2.1で論じた美禰子の理想や完全性の説に基づけば、直子がここで言及している完全世界も一種の理想状態と言えよう。直子は自分の不完全性に気づくと同時に、また「その世界」もキズキの死によって不完全なものとなった。そうして彼女は自分の歪みを調整して、完全な人間になり、キズキがいない現実世界で新たに生活できるように力を尽くしてみた。

「キズキ君は死んでもういなくなっちゃったけれど、あなたは私と外の世界を結びつける唯一のリンクなのよ、今でも。」(P.189)と言った直子は「僕」とセックスすることを通して現実世界と繋がるように努めた。そして、阿美寮に行って治療を受けることまで試みた。阿美寮という療養所は「外界と隔離される」場所であって、まるで別世界のようなところであったが、それは直子にとって心を落ち着かせ、過去を忘れて、全てをゼロからスタートする絶好の場所と思われる。ゆえに、現実世界にいる「僕」と「会う準備ができ」(P.67)るように直子は阿美寮に行った。阿美寮は現実世界と「その世界」の中間点だと言えよう。治療を受けて、現実世界へ帰還したがる直子の気持ちが窺えるだろう。

以上をまとめてみれば、直子は「公正」、「完全」という理想状態を追求していて、自分の欠点に直面するのが苦手な女性である。杉井和子の「浮遊する存在のイメージを持たせられる直子は、実際には誰よりも重く生きる意味を問うている。」<sup>11</sup>という見解を借りれば、つまり直子は不完全な人と認めるが、自分を完全なものにするように努力を続けている。しかし、結果としては、彼女は自分の不完全性を受け入れられず、混乱の状態が続き自殺した。

### 3.2 直子の死

前節で論証した、直子は理想状態を求める人間だという結論を踏まえて、直子の死について解明していきたい。

直子が追求する「正しい」こと或いは「対等」などはキズキとの「その世界」から現実世界へ戻る条件とも言えよう。現実世界でキズキとの「正しい」ことと「対等」が存在しないゆえに、直子は現実世界で生きがたい。言い換えれば、直子にとっては「その世界」には全てが完璧で、一つの汚れもなかった。「その世界」において、二人は分離できないパートナーである。しかし、前述したように、直子が濡れないことで二人のセックスがうまくいかなかった時点から直子は自分の不完全性に気づいた。そして、キズキはわけもなく自殺した。直子にとって、これらは恋人の死がもたらした悲しみだけではなく、「その世界」の崩壊がもたらした衝撃でもある。

あなたは私たちと外の世界を結びつけるような意味を持っていたのよ。(中略) たまたま私たちにとってはあなたとの関りが最初の他者との関りだったのよ。(中略) キズキ君は死んでもういなくなっちゃったけれど、あなたは私と外の世界を結びつける唯一のリンクなのよ、今でも。(P.188-189)

と直子は告白した。キズキが亡くなった後、直子は「その世界」から脱出して、現実世界に戻ろうとする。しかし、彼女は現実世界が自分の不完全性を受け入れないことを深く感じる。積極的に阿美寮に行って治療を受けて、落ち着いたところへ、「僕」という現実世界の方の阿美寮への訪問で、直子は現実世界の不完全性を再び想起し混乱に陥り、現実世界と繋がれない事実を認識したのである。

また、もし、現実世界のリンクである「僕」と性交することが現実世界へ戻る一つの手段と見なすことができるなら、「私、あの二十歳の誕生日の夕方、あなたに会った最初からずっと濡れて

たの。」(P.165) という告白から直子は現実世界へ帰還できるはずだった。が、一方、「その世界」へ戻るリンクがないゆえに、一度「その世界」から離れると、戻れなくなる。こういう状況で、おそらく直子自身も現実世界へ戻るのを恐れていたであろう。言い換えれば、キズキが亡くなったゆえに「その世界」が不完全になり、現実世界に戻らざるを得ない状況に直面している直子は、自分なりに試してみた結果、現実世界より「その世界」の方が馴染みやすいことに気づき、現実世界に戻るのを諦めたのではなからうか。

キズキがない「その世界」はもはや完全とは言えない。一方、現実世界も直子にとっては不完全な世界である。不完全なものを受け入れられない直子は死を選んだのである。つまり、完璧なもの、理想的な状態を求める性格が彼女を死の道へ赴かせたのではなからうか。それが直子の生き方と言えよう。「死は生の対極としてではなく、その一部として存在している。」と語り手が言うように、直子は死という形で生き続けるかもしれない。

#### 4. 結び

以上の考察を通して、次のように美禰子と直子の女性像やその生き方を纏めることができる。二人は共に理想を追求する女性であり、同じく完璧なものを求め続けている。自分の人生に対しても、一点の汚れも許さない彼女たちは、理想状態が破れる時、逃避するという点で一致している。が、その逃避の方法として美禰子は結婚の道を、直子は死の道をそれぞれ選んだのである。

美禰子は青春を捨て、結婚して人妻になる生活を自分が理想的な状態へ戻る方法、そして罪を償う手段とした。一方、直子は一生懸命に現実世界と同化してみたが、やはり現実世界の不完全性により、「その世界」の方がおそらく直子にとって馴染みやすいゆえに、現実世界へ帰還するのを諦めたのであろう。

本稿では美禰子と直子に焦点を合わせて考察したが、『三四郎』が『ノルウェイの森』の原型とは言いきれないが、これについて一層深く考察する必要があるゆえに、今後の課題としたい。

#### 注

- 1 平野芳信 (1997) 「最初の夫の死ぬ物語—『ノルウェイの森』から『こゝろ』に架ける橋』『漱石研究』(9) 翰林書房／山根由美恵 (2007) 「『蜚』に見る三角関係の構図—村上春樹の対漱石意識—」『国文学攷』(195) 広島大学国語国文学会／石原千秋 (2013) 「村上春樹と夏目漱石 国民作家のまなざし」『文芸春秋』文芸春秋
- 2 半田淳子 (2007) 『村上春樹、夏目漱石と出会う』若草書房 P.63
- 3 中山和子 (2003) 「『三四郎』—片付けられた結末』『漱石・女性・ジェンダー』翰林書房 P.50
- 4 「是から東京に行く。大学に這入る。有名な學者に接触する。趣味品性の具った學生と交際する。圖書館で研究をする。著作をやる。世間で喝采する。母が嬉しいがる。と云う様な未来をだらしなく考へて、(後略)」(P.15)
- 5 阿部恒久・佐藤能丸 (2002) 『通史と史料 日本近現代女性史』芙蓉書房出版 P.36
- 6 中山和子は「美禰子は野々宮さんの国際級の科学者の頭脳、冷静な合理主義、研究に明け暮れる地味な生活を一面では敬慕しながら、奔放に夢みがちな身内の情熱と、どこか嘯みあわなないらだちから、意識して挑戦的になりがちである。」と指摘している。(中山和子 (2003) 「『三四郎』—片付けられた結末』『漱石・女性・ジェンダー』翰林書房 P.51)
- 7 中山和子 (2003) 「『三四郎』—片付けられた結末』『漱石・女性・ジェンダー』翰林書房 P.52
- 8 中山和子 (2003) 「『三四郎』—「商売結婚」と新しい女』『漱石・女性・ジェンダー』翰林書房 P.72
- 9 阿部恒久・佐藤能丸 (2002) 『通史と史料 日本近現代女性史』芙蓉書房出版 P.26
- 10 渡辺みえこ (2009) 『語り得ぬもの：村上春樹の女性 (レズビアン) 表象』御茶の水書房／遠藤伸治 (1991) 「村上春樹「ノルウェイの森」論』『近代文学試論 (29)』広島大学近代文学研究会
- 11 杉井和子 (2008) 「『ノルウェイの森』の直子—過去の時間・身体の内化』『村上春樹 テーマ・装置・キャラクター』至文堂 P.195

テキスト

- 夏目漱石 (1966) 『漱石全集 第四卷 三四郎・それから・門』 岩波書店  
村上春樹 (1991) 『村上春樹全作品1979～1989 (6) ノルウェイの森』 株式会社講談社

参考文献

- 遠藤伸治 (1991) 「村上春樹「ノルウェイの森」論」『近代文学試論 (29)』 広島大学近代文学研究会  
平野芳信 (1997) 「最初の夫の死ぬ物語—『ノルウェイの森』から『こゝろ』に架ける橋」『漱石研究』(9) 翰林書房  
酒井英行 (2001) 「村上春樹・『ノルウェイの森』論 (I)」『人文論集』 静岡大学人文学部  
阿部恒久・佐藤能丸 (2002) 『通史と史料 日本近現代女性史』 芙蓉書房出版  
中山和子 (2003) 『漱石・女性・ジェンダー』 翰林書房  
半田淳子 (2007) 『村上春樹、夏目漱石と出会う』 若草書房  
山根由美恵 (2007) 「「蛭」に見る三角関係の構図—村上春樹の対漱石意識—」 国文学攷 (195) 広島大学国語国文学会  
杉井和子 (2008) 『村上春樹 テーマ・装置・キャラクター』 至文堂  
渡辺みえこ (2009) 『語り得ぬもの：村上春樹の女性 (レズビアン) 表象』 御茶の水書房  
石原千秋 (2013) 「村上春樹と夏目漱石 国民作家のまなざし」『文芸春秋』 文芸春秋